

# 平安末から鎌倉初期の「すき」意識

——新古今歌壇を中心として——

岡田 美也子（初等教育科講師）

Consciousness of "Suki" from the End of the Heian Period to the Beginning of the Kamakura Period.  
——Especially in the World of Tanka Poets "Shinkokin"——

Miyako Okada

## はじめに

中世説話にはしばしば和歌やその他の芸能に熱中する者<sup>1)</sup>すき者を「おこ」といつて笑いの対象とする言辭が見える。一方で「すき」は歌人の間では秀歌を詠むのに必要な姿勢ともされていた。この両者の思想の支持者はまったく別世界の住人であつたのだろうか。

西行や鴨長明は「すきもの」の代表と考えられるが、従来の研究は、あまりに彼らを過大視してきたようにも思われる。そのことは、「すき」論の多くが彼ら側から行われていることに端的に表れている。「すき」の本質を見るためには、「すきもの」本人や逸話を書き留めた人々の側からだけでなく、その他大勢の歌人をも視野に入れて相対化していかなければならないであろう。

具体的には、彼らのそばには新古今歌壇という大きな和歌の潮流があり、当時の和歌はむしろ彼らを中心として展開していた。彼らにとって「すき」あるいは「すきもの」とは何だったのか。本稿では、従来の論とは少し角度を換えて、「すき」が主に新古今時代の歌人にとってどのような位置付けとなっていたのか、考察する。

## 一 定家『明月記』と「すき」

新古今歌壇の代表的歌人藤原定家の日記『明月記』には、和歌・連歌を意味する「数奇」の用例が散見する。

- ① 亥の時許りに頭弁・隆雅・忠行朝臣等と相共に和歌を講ず。今夜、殊に人無し。北面の物等、僅かに両三。例に似ず。公卿歌を送る、只一人なり（経家）。披講了りて連歌（五色を賦す）。

百句了りて退出す。狂事数奇なり。鶏鳴以後、廬に帰る。

〔明月記〕 正治二年1200九月二〇日条

② 御共して法輪寺に参ず（為長参ず）。勒韻又和歌の序あり。

申の時、広沢の池に赴く。又勒韻あり。昏黒、広隆寺に帰りて、即ち退出す。数奇の窮屈なり。（建仁三年1203八月八日条）

③ 路次、慶算の北斗堂に行く。房主を喚び出して、談話し、夜に入りて帰る。房主門を出でて、車の簾を褰ぐ興に入るの余り、数奇物の故なり。（建永元年1206一〇月六日条）

④ 寒夜の数奇、無益に依りて退出す。諸卿是より先に、競ひ出で了んぬ。（承元二年1208一月一八日条）

⑤ 先日召しに依り、月に乗じて内大臣殿に参ず。光家車に在り。此の如き数奇、老屈ただ堪へ難し。入興の思ひ無し。殊に依りて参ず。密々に歌合せ有り。……又当座の歌有り、予、風情已に尽き了んぬ。歌の体にあらず。鶏鳴に退出。心神、度を失す。ただ無益の道なり。（建保元年1213九月一三日条）

⑥ ……題冊首計り、人々の歌を部類し講ぜらるべきの由、先日其の定め有り。今夜の儀たるに依り、……。鶏鳴、月末だ入らざるに退出す。老後の数奇病ひ競ひ発る。ただ堪へ難し。（建保三年1215九月一三日条）

⑦ 夜深く了んぬ。心無きによりて退出。暁鐘已に報ずと云々。遠路の車遣りに腰を屈す。極めて堪へ難し。数奇の至りなり。（嘉禄元年1225三月二九日条）

⑧ 午終に連歌を始む。……秉燭に及びて百句を終ふ。客人退きて帰る。暫く休息して帰る。老狂の数奇か。（嘉禄二年1226九月一九日条）

⑨ 皆是れ連歌の余興、数奇の故なり。（同年九月二二日条）

⑩ 此の間に且つ連歌を始む。……人々来たる後、更に賦物を改む愚老詞を加ふる能はず。山月漸く昇りて分散。数奇を調ぶべし。明旦又連歌の催しに依り、五辻大納言殿に参ずと云々。甘心せず。（安貞元年1227三月一六日条）

⑪ 未の時許りに宰相来たる。明後日、数奇微行の事示し合す。承諾し帰る。（寛喜元年1229三月一五日条→一七日柿本影供歌会）

⑫ 廿二日（癸未）。天晴れ、風静かなり。巳の時に蓬門を出づ。京中・野外の桜花盛んに開く。雲の如く、雪の如し。西郊の大聖院に参じて遠望。宮樹開き敷き、未だ散らず。就中、門内の両株・階前の八重、濃艶水芥に映じ、満庭に芳し。実兪僧都・覚寛法印に相謁す。少時にして出でおはします。予、簀子に候する間、覚法印宰相参ずる由を申す。又御前に召す。信実朝臣相具すと云々。即ち召し出すの後、入りおはします。法印、連歌を催す。孝継執筆。信実朝臣賦物、花何水何。甚だ堅く各々停滯、尋常ならず。尊遍僧都・実兪僧都西の座に在り（階の間を隔つ）。予・覚寛・宰相・信実東に在り。八十句を相構ふ。賦物大略尽くるか。仍て之を止む。次で和歌一首を読む。春日庭前の八重桜を翫ぶ。和歌、孝継読み上げ了んぬ（御歌を出されず）。日漸く傾き、予先づ退出。一条大路に於て日入り、廬に帰る。数奇の狂氣と謂ふべし。

（寛喜二年1230二月二二日条）

⑬ 廿二日（癸亥）。朝、雨止む。天猶陰る。連歌尼他界の無常、年来数奇の執心、尤も追善の志有り。彼の中陰の際に於ては、

人頗る思ふ所有るか。……八月彼岸十四日次宜し。或いは連歌の座に列し、或は好道の志有るの輩の中、結縁経を勧進する。

(同年四月二二日条)

⑭ 未斜、備後前司来たるの間、大雨車軸の如し。……予の招請する所なり。数奇の源に依り、来たる八月結縁経を供養する其の志有り。愚札頗る憚り思ふ。

(同年六月二一日条)

⑮ 大学頭来臨。予頗る招請する所なり。数奇盧胡の本性に依り、結縁経勧進の願文、芳心に預るべきの由之を語る。暑熱に依り心無し。

(同年七月三日条)

⑯ 今日白河より法性寺に至り参廻すべし。明日御室に参すべしといへり。未の時許りに右少弁門前の軒に控ふ。物語の由を告ぐるに依り帰ると云々。好士の数奇に依り、毎年駕を枉ぐ。過分の芳志なり。

(寛喜三年1231正月二日条)

これらからは、定家が「数奇」を負の意識を以て用いていることが感じられる。⑬～⑮は、連歌を非常に好んだ或る尼の死に関連した記事で、同年八月十四日には結縁経が集まり、毘沙門堂で連歌尼の供養が行われた。執着である「すき」は、仏教では成仏の妨げとなると考えられても仕方のないものであったから、殊更追善の必要を感じたのである。⑮「盧胡」とは「しのび笑うさま、くすくす。また大声で笑うさま、げらげら。」といった意味であるから、自分の連歌への「数奇」が愚かであることをいい、結縁を行なったものであるうか。また自分に關しては、和歌・連歌の行事への参加を「老狂の数奇」(⑧)「数奇の狂気」(⑫)と言ひ、和歌・連歌に熱中したために病気がひどくなったとばやく様(⑤⑥⑦)から、その行為を自嘲的に捉えているのが感じられる。<sup>(3)</sup>

## 二 新古今前後の「すき」「すきもの」意識

ところで、同じ『明月記』には次のような事例が記される。

・雪紛々たり。朝、天晴る。早旦に参上す。法性寺におはしますべきの由、夜前仰せらるるの処、人々遅々、辰の時に及ぶの間、御出止まり了んぬるの由、仰せ有り。召しに依り御前に参ず。人々遅参の事、勸発の御詞、委細仰せ含ませらる。恥となし、恐れとなす。雪の朝に参ず。更に威儀を具すべからず。只一人、天曙くるに随ひて打ち出で、参すべきなり。中将隨身共人を待ち具し、遅く来たるの条、甚だ見苦し。相府遅々。惣じて数奇の心無きの故なり。壮年若年の人皆此の如し。心中已に冷然たり。仍て法性寺に向ふべからず。隨身共遅参し、云ふ甲斐無し。雪の朝、更に催しを待つべからず。

(正治二年1200正月一九日条)

ある雪の日、定家は逸早く主家兼実のもとに馳せ参じたが、兼実は子息良経ら一行が遅れていることについて「勸発の詞」を彼に与えた。雪を觀賞するのに威儀を調える必要はない、人を連れずとも一人でくればよい、すべては「数寄の心」がないからだといふのである。時代の境目を生きた兼実のいらだちから、鎌倉時代に入つてそうした風潮が顕著になつていたことが推察される。

そして、これとほぼ同じ時代に成立した『無名抄』『十訓抄』もすき心の低下ということに言及している。

・人の数寄と情とは、年月に添へて衰へ行く故なり。

(『無名抄』井出款冬蛙事)

・或はすきに付て咲はる、事もあり。是はむかしの人はことに心

もすきて、花月いたづらに過ぎりけり。今は時代あらたまりて、おもしろき事もさるほどにて、それにのみしみかへりてはなど、心一をやりて人めにあまる難あり。

『十訓抄』第二・可離驕慢事 序

「すき」のために笑われる事もある、今は何か興味深いことがあってもほどほどにし、そのみにひたっているのは見苦しいとされる時代になったとある。逆にいうと、そのような時代になったので、「すき」が笑われるようになった、ということであろう。

このように「すき」「すきもの」が笑いの対象となることは、「すきもの」説話の嚆矢『袋草子』能因説話からすでに言及されていた。節信と能因が初めて会った時、大切に持っていた干涸びた井出の蛙と長柄橋の鉤屑を互いにみせあい、感激して別れたという話の後、

・今世人可<sub>レ</sub>稱「嗚呼」歟。

（『袋草子』上）

と清輔は書き留めている。つまり、和歌やその他の芸事に執するあまり常識から逸脱した行動をまねき、それゆえ人々の眼に愚かと映るのが、「すき」なのである。しかし一方で清輔は、

・古き歌仙は皆すける也。然バ能因ハ人に好給へ。好ぬれば秀歌は讀ぞとぞ申ける。

（同）

と秀歌を詠むためには「すき」の精神が必須であるという能因の詞も載せている。

ここで、先の『明月記』の記事に戻り、良経と兼実の姿勢の違いの原因を政治的立場の相違から考えたい。建久七年（1196）の政変以降兼実は政治の表舞台からは身を引き、建仁二年（1212）三月には出家をする。一方良経も政変後は蟄居の身であったが、正治元年六月

に左大臣に任命され、十二月には五年ぶりに院に拝謁を賜った。先の記事の時良経は、九条家復活の時期にあつて繁忙を極めており、また第一線の政治家として容易に威儀をくずすこともできなかったと想像されるのである。彼に雪を愛でる心がなかったわけではないことは、次のような和歌から充分にうかがえる。

210 春の花秋の月にもこりける心のはてはゆきのゆふぐれ

（『秋篠月清集』十題百首 天象十首）

つまり「すき」を実際の行為として謳歌した者は、政治機構の中核からは外れた者であり、それ以外の人々は良経のごとく官人としての作法を無視するほどに「すき」に没頭することができなかったと考えられる。そして「すき」が笑いの対象となるのは、それが政治機構の外にあること——負の概念で捉えたと、不遇であること——と関わっているからではないか。

それでは、自らも歌人であった清輔は、先の詞をどういう思いで書き留めたのか。『袋草子』は二条天皇に進覧したものである。そのことを考えると、他人の目に触れることを前提としたところに官人としての意識が働き、「今世人可<sub>レ</sub>稱「嗚呼」歟。」を付加したのではないかと想像される。「おこというであろうか」と疑問で結んでいるところに清輔の微妙な立場がうかがえるのである。

### 三 「数奇」の表記

目崎氏は能因の「すき」に関して、不遇・沈淪意識がその契機となつてゐることを述べられた。<sup>(4)</sup>そして、人が才能に応じて登用されず、権門とのつながりが出世の鍵となつてくる時代の証左として、

『類聚符宣抄』承平五年(一一三三)八月二十五日橘直幹状をあげている。同様の趣旨で彼が自己の不遇を訴えたものに、『本朝文粹』所収の申文があり、そのなかに「数奇」の文字が見える。そこで、次に漢文における「数奇」の意味を考えたい。

・……固に知りぬ儒業の拙き、惣てこれ数奇の源なり。……殊に天恩を蒙りて、件の闕に兼任せられ、暫く陸沈淹屈の愁へを慰めんことを。

(『本朝文粹』六・奏状中 天曆八年八月九日)

正五位下行文章博士橘朝臣直幹、誠惶誠恐謹言

特に天恩を蒙りて民部大輔の闕に兼任せられんと請ふ状)

橘直幹は、大学頭を経て天曆三年(一一三三)文章博士となった。その後同八年(一一三八)民部大輔に任ぜられることを願って申文を奉ったが、聞き入れられなかった。このことは『十訓抄』十、『古今著聞集』四などに説話化、『直幹申文絵詞』も作られ、中世人好みのエピソードであったことがうかがえる。この申文では「数奇」は、「儒家としての学問が劣っていることがすべて不遇の原因である」という嘆きに用いられている。

中国文学における「数奇」用例としてよく引かれるのは、司馬遷『史記』李將軍伝の「以為李廣老數奇。母令當單于」。恐不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>所欲<sub>レ</sub>。だが、ここには日本古典文学に多大な影響を及ぼした白居易の漢詩から挙げておきたい。

・十年四海故交親

零落唯殘兩病身

共遣<sub>三</sub>數奇從<sub>二</sub>是命<sub>一</sub>

同教<sub>二</sub>步蹇<sub>一</sub>有<sub>二</sub>何因<sub>一</sub>

眼隨<sub>レ</sub>老減嫌<sub>二</sub>長夜<sub>一</sub>

體待<sub>レ</sub>陽舒望<sub>二</sub>早春<sub>一</sub>

新樂堂前舊池上

相過亦不<sub>レ</sub>要<sub>二</sub>他人<sub>一</sub>

(「歳暮病懷 贈<sub>二</sub>夢得<sub>一</sub>」 時與夢得。同患足疾。)

『白樂天詩後集』卷一六)

友人劉禹錫に送った漢詩で、「近頃十年ばかりの間に旧友は殆ど死んでしまい、残っているのは君と僕だけだ。共に運が悪くて今日のような境遇になり、何の因縁か足まで不自由になった。視力は老いに従って衰えて長い夜を厭う。」とある。

つまり、本来漢語の「数奇」は、「スウキ」あるいは「サクキ」と読み、不遇の意であったが、日本では風流事への熱意・執着の意の表記に使われるようになったのである。この移行はいつ頃のことであろう。

古辞書では平安末期の『色葉字類抄』に、

・数奇 サチナシ スキ マサリカラナシ

(前田家本『色葉字類抄』)

サ・ス・マ量字に分載されているものをまとめた)

とでているが、ここにはまだ執着や偏愛といった意はみえず、漢語本来の義「サチナシ」が記されている。ところが室町時代になると、

・数奇 スキ 辟愛<sub>(ヘキアイ)</sub>之義也<sub>(ナリ)</sub>

(『下学集』下 言辭門第一七)

とあり、さらに間を探ると、成立年次は特定できないが、「定家仮名遣」として普及していた『仮名文字遣』には、

・すいたる人 逸人 数奇 文集

(行阿撰『仮名文字遣』)

とある。

偏向・偏愛の義の「すき」という和語は、中古から存在していたわけであるが、管見ではこれに「数奇」「数寄」の字があてられた例は、『袋草子』『明月記』あたりからである。とすれば、十三世紀

頃に「数奇」が執着や偏愛の意となる境がありそうだ。<sup>(5)</sup>

#### 四 文人貴族の不遇説話

一二―一三世紀には文人貴族の不遇観をめぐる説話が多く見られるが、彼らはしばしば「すき人」の扱いを受けている。まず源顕基についてみてみよう。

・いといみじきすき人にて、朝夕琵琶をひきつつ、「罪なくして罪をかうぶりて、配所の月を見ばや」となむ願はれける。

（『発心集』五―八 中納言顕基、出家・籠居の事）

顕基は実際には不遇であつたわけではなく、自らそれを望んでいただけであるが、この説話は『江談抄』『古事談』『十訓抄』『徒然草』などにも伝えられ、彼の精神は当時絶大な共感をえた。例えば『平家物語』にも次のように応用されている。

・もとよりつみなくして配所の月を見んといふ事は、心あるきは人の願ふ事なれば、大臣あへて事共し給はず。彼唐太子賓客白楽天、潯陽江の邊にやすらひ給けん、其古を思遣、鳴海渦塩路遙に遠見して、常は朗月を望み、浦風に嘯、琵琶を弾じ、和歌を詠じて、なをざりがてらに月日を送らせ給ひけり。

（『平家物語』三 大臣流罪）

先に挙げた白楽天の左遷中の態度も引き合いにしながら、それが詩人の境遇としてふさわしいものであると認め、受け入れている。

次に在原業平の説話である。

・心一つにのみ思ひて過ぎけるに、業平朝臣、『髪を生さん』として籠り居たりける程、『歌枕ども見ん』とて、数奇に寄せてあ

づまの方へ行きけり。

（『無名抄』小野とはいはじの事）

二条后を誘拐したところ、后の兄弟に見付けられて髻を切られたため、その髪がのびるまで籠もっていたが、その後歌枕をみるためと風流にかこつけて都を離れたというのである。彼が『伊勢物語』の主人公昔男のモデルとなっていることは周知である。その『伊勢』では「すきもの」が、色好みの意（第五八、六一段など）とともに和歌愛好者の意（第一四〇段など）にも使われている。しかし、中世では「すき」が流離と一対にして語られるようになってくることに、注目しておく必要がある。

最後に実方中将について、彼もまた同時代には、

・世のすき物に恥じういひ思はれ給へる、その君をぞ、この女御、大方のよろづのもののはえにものし給ふ。

（『栄花物語』第四・みはてぬ夢）

と「すきもの」と呼ばれた。これは「すきもの」が称賛で用いられているが、中世の実方像に関しては悲劇的・喜劇的両面を合わせ考えなくてはならない。

・大納言行成卿いまだ殿上人にておはしける時、實方中将、いかなる憤か有けん、殿上に參會ていふ事もなく行成の冠を打落て、小庭になげ捨てけり。行成少もさはがずして、とのもり司をめして、冠取て參れとて、冠して守刀よりかうがいぬき取て、びんかいつくろひて居直りて、いかなる事にて候やらん。忽にかうほどの亂冠に預るべき事こそ覺え侍らね。その故を承りて後の事にや侍るべからんと、ことうるはしくいはれけり。實方はしらけてにげにけり。折しも半部より主上御覽じて、行成はいみじき者也。かくをとなしき心あらんとこそ思はざりしかとて、

そのたび蔵人頭あきたりけるに、多の人を越てなされにけり。  
實方をば中将をめして、哥枕見て参れとて陸奥國の守になして  
ぞつかはされける。やがてかしこにて失にけり。……

（『十訓抄』第八・可堪忍于諸事 行成爲実方披打落冠事）

この説話はこれ以前『古事談』第二・臣節<sup>(6)</sup>にも採られており、実方の陸奥下向の経緯を語ったものであるが、実方が激しやすい性質の人として描かれている。「歌枕見て参れ」という帝の言葉は、先の業平が「歌枕ども見ん」といつて東下りをしたことと関連がある<sup>(7)</sup>。ただし同じ歌枕への執着をいうのに、長明が業平の態度を評価している<sup>(7)</sup>と見えるのに対し、『十訓抄』では実方左遷の契機としてある。二にあげたように『無名抄』長明が「すき」心の低下を嘆くのに対し、『十訓抄』編者は「すき」が笑われることもあるという時代認識を述べていた。二書の相違は編者の立場と「すき」意識に關係すると思われるが、この点について今は深く立ち入らない。話を実方に戻して、彼の「すきもの」像としてより注目されるのが、次の説話である。

・昔、殿上のをのこども、花見むとて東山におはしましたりけるに、俄に心なき雨のふりて、人々逃げ騒ぎ給へりけるに、実方の中將いと騒がず、木の本に立ち寄りて、かく、

桜がり雨はふりきぬおなじくは 濡るとも花の陰にくらさむ  
とよみて、かくれ給はざりければ、花よりもりてくだる雨にさながらぬれて、装束しほりかね侍る。此事、興ある事に人々思ひあはれけり。又の日、斉信大納言、主上に、「かゝる面白き事の侍りし」と被<sup>レ</sup>奏<sup>セ</sup>に、行成、そのとき蔵人頭にておはしけるが、「歌は面白し、実方はをこなり」とのたまひてけり。

実方もり聞き給ひて、ふかく恨をふくみ給ふとぞきこえ侍る。

（『撰集抄』卷八・一七 実方中将歌事）

行成が蔵人頭であるのは、先の冠説話とくいちがうが、これはむしろ冠説話を想起させようとする意図的な創作と考えたい。雨に濡れるのも厭わず、桜の下で和歌を詠むのは、まさに「すき」の態度である。この説話からは、貴族にとって「すき」の態度は不遇に繋がるものであり、また滑稽とされる姿であったことがわかる。

三に述べたように「すき」に「数奇」の表記があてられるようになる背景には、こうした説話が生み出される流れと共通の精神があったのではないか。

定家に関して少し検討を加えよう。

まず白居易の影響が新古今歌人に大きかったことは、すでに多く指摘がある。それは『白氏文集』が中心であるが、定家晩年の「すき」に対する自嘲が老いや病氣とともに吐露されるのは、あるいは『白楽天詩後集』の詩にみた慨嘆とも關係があるのではないだろうか。白居易と同様定家も老眼の不便をいつている。

・……各々五十首の歌を送る。人望に似たりと雖も、老眼の苦しみのみ  
（『明月記』建保三年九月二四日条）

・為<sup>レ</sup>備<sup>レ</sup>後学之証本。不<sup>レ</sup>顧<sup>レ</sup>老眼之不堪。手自書<sup>レ</sup>之。

（『古今和歌集』奥書 貞応二年1223七月二二日）

また承久二年1220二月十三日の内裏歌会に提出した、

2747みちのべの野原の柳したもえぬあはれ歎の煙くらべに

（『拾遺愚草』雜 述懷）

は、伝菅原道真作の古歌をふまえ、謀臣・讒臣の影に隠れて賢臣である自分が登用されないことを歎いたととれるため、院の怒りを

かつたと見られている。<sup>(8)</sup> かつて橘直幹が才人が登用されないことに對する不満を訴え、また能因がそういう世の中に見切りを付け、遁世したとみられることと同様の思いといってよいだろう。

そして、実方中将が激昂によつて左遷されたという説話は、定家に次の不祥事があることも思い合わされる。すなわち文治元年(1185)二十四歳のとき、彼はまだ正五位下侍従の職に止まっていたが、十一月豊明節会の試楽の夜、六才下の従四位下右少将源雅行に嘲弄されて怒り、彼を脂燭で打つたために除籍されたというものである(『玉葉』一月二五日)。その雅行は、『明月記』に「数奇」の語が増加してくる嘉祿二年八月、不倫の息親行を殺した罪で、洛外に追放される。

『無名抄』『発心集』は鴨長明、『古事談』は源顕兼、と両書は新古今歌壇に関係した人々によつてしるされた。<sup>(10)</sup> つまり定家の言辭は、これらの説話が語られるのと同基盤にあつたのである。各説話集の成立時期は彼の晩年に当たる。その頃彼は、こうした人物たちと自分の過去を重ねて「すき」に自嘲的な思いを抱いたとも考えられる。またこのことから、歌人の「すき」精神を揶揄したように見える『撰集抄』の実方説話でさえ、歌人間で生成された可能性も十分にあるといえるのである。

## 五 後鳥羽院の「すき」

さて、次に歌壇の最高権威者である後鳥羽院の「すき」について見てみよう。

院が「すき」に言及しているのは、『後鳥羽院御口伝』である。

・惣じて彼の卿が哥存知の趣、いさ、かも事により折によるとい

ふ事なし。ぬしにすきたるところなきによりて、我が哥なれども、自讃哥にあらざる「を」よしなどいへば、腹立の氣色あり。先年に、大内の花の盛り、昔の春の面影思ひいでられて、忍びてかの木の下にて男共の歌つかうまつりしに、定家左近中将にて詠じてはいく、

としを経てみゆきになる、花のかげふりぬる身をもあはれとや思ふ

左近次将として廿年に及びき。述懐の心もやさしく見えし上、ことがらも希代の勝事にてありき。尤も自讃すべき哥と見えき。先達ども、必ず哥の善悪にはよらず、事がらやさしく面白くもあるやうなる哥をば、必ず自讃哥とす。……

院の「すき」観は、一見解しにいい。この言葉にそつて解釈するならば、「事により折による」「哥の善悪にはよらず」というのであるから、ひたすら何かに執着し、また秀歌を詠むことを目標とした「すき」の先輩たちとは、随分と異質な考えであるように思われる。

しかし、このエピソードの背景となつた大内の花見は、院にとつては自己の権威と和歌活動両面からみて、重要な意味を持っていた。定家の頑なな態度が怒りをかつたのも、院が並々ならぬ執着をもつていた大内の桜にまつわる和歌を自賛歌とすることを拒んだためであつた。<sup>(12)</sup> 定家と院のすれ違いは、「すき」観の相違なのである。<sup>(13)</sup> 自己基準に従つて秀歌を撰ぶという定家の「すき」に對し、院が、どちらかといえば、事物にこだわる「すきもの」の性質をもつていた証拠として、長柄橋の問題に触れておきたい。

・むかしのながらのはしとかやは此渡りなりけんかし。たゞ名ばかりをき、わたるに跡をだにみてがなとおぼしめいたり。いづ



くをさしてかこえむすべきなとかつはわらひ申あへり。御まへに少将雅経候がそのはしぐらのきれはもちて候ものと申。京にていそぎまいらすべきよしおほせあり。たゞしくちたる木のはしにはべり。なばかりのしるしにかはさとおほしめすべきなど申あへり。

(『源家長日記』)

院が御幸の際に、すでに朽ち落ちてしまっていた長柄橋の跡を見たり、結局飛鳥井雅経が柱の木切れを所有しているというので、持つてこさせた。それで和歌所の文台をつくらせたことが、『家長日記』『明月記』などから知られる。

この記録からも、歌枕長柄橋に貴族たちが「すき」心を動かさなくなっているのがわかる。その中で院がこれほどまでに執着を顯にすることができたのは、他の貴族とどこが違ったのであろう。「すき」を他の歌人のように回避したり、肯定のための理由付けを必要とせずに、そのまま没入することができたのは、結局は院が政治機構の中では最高位にあったからではないだろうか。前述のごとく、「すき」はその逸脱した行為によって、不遇の人生とも関係をもっていた。よって定家のような宮廷貴族は、自己の不遇の官途を思い、「すき」を半ば自嘲的に言った。たび重なる争乱の中で院の権力が絶対的なものでなくなっていたことは、確かである。しかし院は、少なくとも「すき」と自己の官途の上下を結びつけて、それについて憂慮する必要はなかった。ただし天皇制が最も正常に機能していた王朝時代への憧憬は、深まっていた。そのように考えると、大内の花見と長柄橋への執着は、院の中では秀歌云々の問題ではなく、王朝文化の名残を持つ事物への執心を共通項としてくることができるのである。

## 六 西行と「すき」

これまで西行には敢えて触れずに「すき」を論じてきた。西行はいわゆる数寄者の代表的存在とみられ、目崎氏<sup>14</sup>をはじめ、遁世の理由を「すき」に求める説は有力となっている。しかし改めて見ると、西行が同時代人、ことに新古今歌人に「すき」の人と評価された例は見当たらない。

・おほかた、哥はすきのみなもとなり。心のすきてよむべきなり。住吉の明神もそれを色／＼に感じ給なり。したがひて太神宮の神主は、心きよくすきて和哥をこのむべきなり。御神よろこばせ給べし。……和哥を大事として他事をばいとしらずして、六十余廻の春秋を、くれり。むかし上人のいはれしは、つねに心すむ故に悪念なくて、後世をおもふもその心す、むなりといはれき。

(『西行上人談抄』蓮阿記 内閣文庫本)

・心源上人語云、文學上人は西行をにくまれけり。其故は遁世の身とならば、一すちに佛道修行外不<sup>レ</sup>可<sup>二</sup>他事<sup>一</sup>。數寄をたて、こ、かしこにうそぶきありく條、にくき法師也。いづくにても見あひたらば、かしらを打わるべきよし、つねのあらましにて有けり。弟子ども、西行は天下の名人也。もしさる事あらば可<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>珍事<sup>一</sup>となげきけるに、或時、高尾法華會に西行参りて、花の陰など詠ありきける。

(頓阿『井蛙抄』)

・いさ、か世俗の能藝。作事に携さはらん輩は日夜さはりのみ侍て、むねのうちの工夫をろそかなるべく哉。たゞ數寄と道心と閑人との三のみ大切な好士なるべく哉。西行上人をもろくの

明聖に越てふか説々の上手。例の人丸の再誕とのみ勅定ありしも、たとへば、世俗の凡情をはなれたるむねのうちを仰侍るなるべし。

(心敬『老のくりごと』)

西行にまつわる「すき」の語は、『西行上人談抄』のように弟子が西行の言として記した例か、あるいは少し後十四、五世紀の人々によつて付された性質であつた。一方新古今歌人たちは、西行に「すき」という評を与えていない。心敬が引く後鳥羽院の西行評でも「すき」の語は使われていないのである。それは、西行と他の「すきもの」達の間に一線を画するものがあつたことを示しているのかもしれないが、むしろ西行を尊敬の対象としていた彼らにとつて、彼が「すき」という言葉で言い表すべき存在ではなかつたからと考えるべきではなからうか。

## 七 兼好と「すき」

もう一人中世における「すき」を論じる上で外せない人物は、兼好である。彼と「すき」についても、例えば白石大二氏が「すき者兼好」として詳しく考察されている<sup>15)</sup>。しかし、彼を「すき」の観点から見る時には、少し注意がいりそうである。

兼好が「すき」という語を用いているのは、次の二ヶ所である。

・よき人はひとへに好けるさまにも見えぬ、興ずるさまもなをざりなり。かたる中の人こそ、色濃くよろづはもて興ずれ。花のもとにはねぢ寄り、立寄り、あからめもせずまはりて、酒飲み、連歌して、はては大なる枝、心なく折り取りぬ。

(『徒然草』一三七段)

・若き時は、血氣内に余り、心物に動きて、精欲多し。身を危ぶめて碎けやすきこと、玉を走らしむるに似たり。花麗を好みて宝を費し、これを捨てて苔の袂にやつれ、勇める心盛りにして物と争ひ、人に恥づ、羨み、好む所日々に定まらず。色に耽り、情に愛で、行をいさぎよくして、百年の身を誤りて、「命を失へるためし願はしくして、身の」全く久しからむことをば思はず、〔好ける方に心引て〕長き世語りともなる。〔身を誤つこと〕は、若き時のしわざなり。

(同一七二段)

白石氏は「すき者」として兼好の諸性質を考察されたが、彼自身は、恋愛事であろうと風流事であろうと、「すき」という語で捉える物事——極端な行為や精神——に関して、否定的にみていたことは確かであろう。『徒然草』には、『無名抄』『発心集』に「すきもの」としてとりあげられた登蓮のますほの薄説話や源顕基説話も採られているが、彼らは「すきもの」であることによつて評価されているのではない。彼の「すき」観は新古今時代のそれに近いようだ。

しかしながら、すでに指摘されているように兼好自身人から「和歌數寄者也」(『園太暦』貞和二年「346閏九月六日」と称されてしまっている。それは同時代の「すき」観から説明が付くであろう。西行の箇所ですれ触れたように頼阿や正徹、心敬といった兼好に時代が近い人たちは、「すき」に正の価値を見出だしていた。

・か様に昔の先達も初心から名譽はなかりし也。稽古數寄劫積りて、名望有りける也。今の時分の人、いまだ哥ならば一、二百首讀みてやがて定家・家隆の哥を似せんと思ひ侍る事、おかしき事也。……只數寄の心深くして、晝夜の修行怠らず先々なびく／＼と口がろに讀みつけなば、自然と求めざるに有興所へ行

きつくべき也。……不斷の修行を勵まして年月を送りなば、終に自得發明の期あるべき也。只數寄に越えたる重寶（も肝要もなき也。上代にも數寄の人々は古今の）大事を許し勅撰にも入れられ侍り。誠の數寄だにあらば、などか發明の期なからむ。

（『正徹物語』下・一〇三）

これらに見られるように、「すき」が正の概念として捉えられるようになったのは、西行に加え定家ら新古今歌人の評価が定まった時代であった。

彼らの価値観によって兼好は「數寄者」と呼ばれたのであるが、「すき」を志向しながら同時代の歌人には「すきもの」とされなかった西行と対照的であり、ある意味では皮肉な現象である。

## おわりに

以上まとめると、新古今歌壇の時代の貴族の間には、「すき」を評価する姿勢は、確立されていなかったといえる。定家のように内省的態度を持った歌人は、「すきもの」としての自負と、場合によってはそれに起因する官人としての不遇意識という矛盾を、自己の中に抱えていたと想像される。「すきもの」への評価の一面を伝えるものとして必ず引かれる「今世人可<sub>レ</sub>稱<sub>二</sub>嗚呼<sub>一</sub>歟。」これを問いつけの形で記したのは、歌人であり官人であった清輔の微妙な気持ちのゆれの反映であると考えられる。歌人である前に官人であった彼らは、和歌のみに没頭することはできず、「すき」に完全な正の価値を抱くことはできなかった。

従来の「すき」論で中心となっていた「すきもの」説話を多く伝

えた、鴨長明の姿勢は、むしろ当時の和歌世界では異質であったのではない。きつかけが自分の意志ではなかったにせよ、彼は歌壇と宮廷組織を脱していたから、能因・西行といった先輩を継いで「すき」を正の概念として受け入れることができたのではない。

注

- (1) 唐木順三氏『中世の文学』『中世文学の展開 一 すき』筑摩書房 S 30・10、目崎徳衛氏『西行の思想史的研究』第四章 數奇と遁世 吉川弘文館 S 57・6
- (2) 大漢和辞典 大修館書店
- (3) ⑩も全体の主語は貴人（「殿下」は九条道家か）だが、「數奇」は自分たちの和歌の催しを差し、恐縮していった語と思われる。
- (4) 「能因の伝における二、三の問題」『芸林』10・2、3 S 34・4、6（引用は『平安文学史論』桜楓社 S 43・11）
- (5) 「すく」という和語は、觀智院本『類從名義抄』などでは様々な表記が考えられるが、その中の一つに「逸」の字が見える。また「すき」の漢字表記については、近世になって岡本保孝が次のようにまとめている。

・孝云、下学集より慶長十六年の節用集迄は、奇僻の奇の字をかき、正保三年の節用集より今日までは、寄附の寄の字をかく。いかなることにか。……抑々すきといふ詞は、數奇の字音にあらぬこといふもさらなり。史記李広伝（漢書にも）に、數奇の字面あれど、こゝによしあることにあらず。只すきといふ詞を數奇とかけるまでの仮字なり。字義をとるにあらず。……

（『難波江』五上 數奇）

「寄」の字がいつから使われるようになったかは定かではない。

(6) こちらでは行成と実方が口論をしたことになっている。

(7) 二人を一对視する例として、業平・実方が岩本社・橋本社と  
いった形で隣り合った地に祀られていたということがあり、その  
ことは『徒然草』六七段に言及されている。

(8) 久保田淳氏『王朝の歌人 9 藤原定家』集英社 S 59・10 に詳  
しい。

(9) 目崎氏注 4 論文。能因の俗名橘永愷であるが、『明月記』には  
同じ橘氏の長政という人物が再三数寄の歌人として登場する。

・未の時許りに法眼来臨。言談するの間、能州(橘長政——引用  
者注)又来る。皆是れ連歌の余興、数奇の故なり。

(『明月記』嘉禄二年九月二二日、後半は数奇の用例として  
すでに本文に引用した。)

不遇意識に伴う数寄に関して、彼らを通して橘氏一族の性向を  
定家は想起し、自省の材としたことも考えられよう。

(10) 『十訓抄』の編者は未だ決定をみないが、内部微証から漢詩人  
として歌壇の行事に参加した菅原為長が有力候補としてあげられ  
ている。

(11) 定家の官位に対する執着と不遇意識については、辻彦三郎氏『藤  
原定家明月記の研究』第一編 明月記 自筆本の研究 第一章  
藤原定家の輪郭』吉川弘文館 S 52・5 に詳しい。

(12) 久保田氏『『新古今集』の美意識——大内花見の歌三首を軸に  
して』日本文学協会編『日本文学講座 9 詩歌 I (古典編)』大修  
館書店 S 63・11 (引用は『藤原定家とその時代』岩波書店 H  
6・1)

(13) 定家と院の「すき」観の相違は、「すき」の史的展開からも注  
目される。なぜなら二人以外の「すき」にも、

① 和歌を詠むこと自体に執着する者——『無名抄』の源頼政・

同頼実、『十訓抄』の藤原惟規・河内重如など

② 歌枕や歌材、作歌の外的誘因に執着する者——『袋草子』の  
能因、節信、『無名抄』の登蓮、『宇治拾遺物語』の「こくあん」  
(りうぐあん——隆源の誤写力) など

の二系統があると思われるからである。もちろん能因の思想に見  
えるように、②の目的も秀歌を詠むことで、精神面で両者が通じ  
ることもあるが、行為としての「すき」は分けられるようだ。

(14) 目崎氏注(1)著書

(15) 『徒然草と兼好』第二部 兼好评伝 第五節 すき者兼好「徒  
然草の徴表的語句と関連語句 道的好士」ぎょうせい S 48・7

(16) 心敬の用例については、島津忠夫氏に詳しい論考がある(『岩  
波講座 日本文学と仏教 第五巻風狂と数奇』第五部 数奇  
第一章 ささめごと』岩波書店 H 7・9) が、西行・長明に始  
まる「すき」と仏教的道心の結合の系譜に列なるものといつてよ  
いであろう。

## 引用文献

『栄花物語』『歌論集 能楽論集』(無名抄、後鳥羽院御口伝、正  
徹物語) 日本古典文学大系  
『本朝文粹』『古今和歌集』『平家物語』『方丈記 徒然草』新日  
本古典文学大系

- 『方丈記 発心集』新潮日本古典集成  
『十訓抄』新訂増補国史大系  
『西行全集』（西行上人談抄）久保田淳氏編 日本古典文学会  
『井蛙抄』日本歌学大系5  
『老のくりごと』群書類従 卷三百五  
『撰集抄』小島孝之氏・浅見和彦氏編 桜楓社  
『訓読明月記』今川文雄氏編 河出書房新社  
『源家長日記』校本・研究・総索引』源家長日記研究会編 風間書房（読点、濁点は私意）  
『園太暦』岩橋小弥太氏・斎木一馬氏校訂 続群書類従完成会  
『難波江』日本随筆大成 二期・21  
『史記』新訂中国古典選12 朝日新聞社  
『白楽天詩後集』佐久節氏訳解 続国訳漢文大成 国民文庫刊行会  
『色葉字類抄漢字索引』島田友啓氏編 紀峰社  
『元和三年板 下学集』山田忠雄氏監修解説 古辞書叢刊第二 新生社  
『秋篠月清集』『拾遺愚草』新編国歌大観 角川書店